

約束

三月十一日、真っ黒い水の中をがれきと一緒に「助けて」と叫びながら人が流されていく。救えなかった命。二度と戻らない笑顔。私の育った街、今はがれきの街、石巻。いちろの望みをかけた捜索で、見つかった運ばれるのは泥にまみれた遺体だけ。常に目の前にある光景。参ってしまった私は二日に一回の食事すら手をつけることができず、ただ呆然と避難所の床に座っていました。そんなとき、私の肩をたたく人がいました。

「このおまんじゅう食べな。ひたっちゃったけど、笑顔になるおまじない、かかっとなるから。」それが、笹原のおばあちゃんとの出会いでした。砂混じりのおまんじゅうはなぜか、食べる涙があふれて、しかし、確かに笑顔になったのです。その日から私は毎日そのおばあちゃんと一緒にいました。九十六歳のおばあちゃんと、学校の話や友だちの話をしました。余震の続く夜は、真っ暗闇の中で、私の手をぎゅっとにぎっていてくれました。

しかし、そんなおばあちゃんとの別れはすぐやってきました。私は、避難所を出て、仙台の親戚の家へ身を寄せることになりました。最後の夜、おばあちゃんは私にこう言いました。

「仙台に行ったら友だちと仲良くするんだよ。でもね、必ず戻ってきて。必ず石巻に戻ってきてね。」

私の顔は、出会いのときと同じく、ぐちゃぐちゃになってしまいました。私は約束したのです。

仙台では新しい生活を始めよう、挑戦していこう、と思ったものの、最初は「私たちも被災したんだ。」というクラスメイトの言葉にも何か違和感を覚えていました。なかなか友だちもで

きず、ただ下を向いて生活する日々でした。転校してすぐの修学旅行も、石巻が苦しんでいる今、私だけがもう普通の生活でいいのか、楽しんでいいのかと悩みました。楽しさの裏側にいつも罪悪感がありました。つらさの裏側にいつも「もっとつらい思いをしている人がいる。」という気持ちが起こってきて、何をして満足感を得ることができませんでした。

しかしそんなとき、笹原のおばあちゃんが亡くなったと聞きました。私は思い出していました。あのときに考えた「死ぬこと」「幸せ」そして「あの約束」。なぜ私は前向きに生きていこうと決めたのか。目の前にある幸せは、当たり前前にあるのではなく、いろいろな思いがあつてこそ幸せであり、いろいろな人との出会いがあり、支えがあつてこそ、私は生きる意味を見つけることができたのだと。たとえ充実した毎日でなくてもいい。前を向いて胸を張って一分一秒を刻むように生きていきたい。

それを教えてくれた街、おばあちゃんや多くの人の思いが詰まった私たちの街。このままでは終われない。

私には、今、夢があります。それはただ約束のために石巻に帰るのではなく、街のために働きたいのです。輝く石巻でなくてもいい。全てを思い出ししてしまふのではなく、人々の思いをつないだ街をゆっくりでいい、ゆっくりでいいからつくっていききたいのです。

(青葉区 三年 生徒作文)

「考えてみましょう」

●「私」はどうして「このままでは終われない。」と思ったのだろうか。

●「私」にとって、笹原のおばあちゃんとの「約束」は、どのような意味を持つのだろうか。



がれきが散乱する水田から市街地を望む(荒浜)